

# 倫理 第44回「フランクフルト学派と分析哲学」

○今回のポイント

## 1. フランクフルト学派

(1) 【①】とは

⇒1930年代のドイツ・フランクフルトで活動をはじめた思想家グループ。ほぼ全員がユダヤ人。ナチスの迫害を受けた。戦後、既存の社会を支配する思想を批判し、ファシズムの野蛮行為や管理社会における人間の一元的支配を批判した。単に現実社会を説明するだけでなく、根本的に変革することを目指す【②】。

(2) 道具的理性

近代理性：人間を未開状態・野蛮状態・迷妄状態から解放し、人間を世界の支配者へと変える

↓

人間の内的自然(本能・衝動・感性・感情など)が、不合理・非能率的なものとして排除される

↓

人間の感性を計算可能・操作可能なものとして扱うようになる

↓

理性が、いかにしたら巧みな処世と出世が可能になるか思考する単なる道具・手段へと墮落

↓

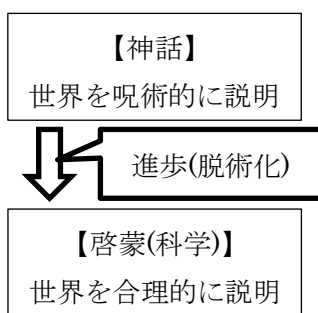
【③】…一定の目的を実現するための手段や道具としての理性。一定の目的に対する手段を判断し、もっとも効率的に目的を達成する方法を計算する。産業社会の利益獲得のためには、ファシズムの侵略政策や核兵器の開発にさえも奉仕する。

(3) 【④】

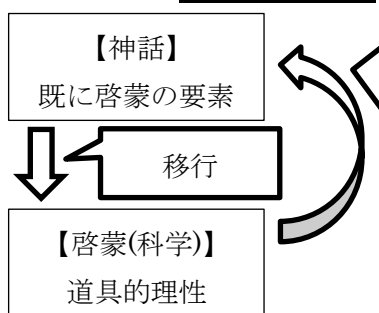
- ・『【⑤】』…ルネサンスや宗教改革をつうじて自由を獲得したが、束縛からの自由による不安や孤独に耐えきれず、自由から逃走してナチスのファシズム(全体主義)に吸収され、服従や従属をみずから求めた心理を分析。
- ・【⑥】…上位の他者の権威に盲従しつつも、下位者にみずからへの服従を求める現代人の社会的性格。自分の行動を反省することなく、命令と服従の硬直した人間関係によって行動し、組織の命令で平気で残虐行為や不正を行う。  
※Cf. アイヒマン裁判

(4) 【⑦】 & アドルフ・【⑧】 (共著)

【一般的な見方】



【ホルクハイマー&⑨】



【⑩】

⇒人間は外なる自然の威力から解放されたが、人間の感情や欲望などの内なる自然をも抑圧しすぎた。そのため、啓蒙された文明がファシズムや戦争などの反文明的な暴力性となってあらわれ、新たな野蛮として逆戻りしてしまう。

## 2. 分析哲学

### (1) 【⑪】とは

⇒日常会話や哲学命題を分析し、何を意味しているのかを明らかにすることによって、問題そのものを解消しようとする。

例) 日常会話「ケーキある？」という場合

- ・ケーキの存在(あるかないか)を議論するのではない
- ・「ケーキはあるか？」という会話がどのような意味で語られているのかを分析
  - ⇒嫁に「ケーキある？」と尋ねる。(「ケーキ食べたい」という意味)
  - ⇒お店で店員に「ケーキある？」と尋ねる。(「ケーキを売ってください」と意味)

### (2) 【⑫】

#### a. ウィトゲンシュタイン前期『⑬』

##### ・【⑭】

⇒言語は世界全体を写しだす像である理論。世界は事実の集合体であり、その事実を写しだす言語と事実の間には、一対一の対応関係が成り立つ、とする。

##### ・【⑮】

⇒言葉と現実の事象とは、正しい対応関係を持っているから、神や道徳など現実の事象と対応しないものは、言葉によって論理的に確認することはできない。

#### b. ウィトゲンシュタイン後期『哲学研究』(遺稿)

##### ・【⑯】

⇒写像理論を否定。言語は事実を指し示すものではなく、日常生活における人々の交錯の中で機能するものとされる。

⇒会話という言語ゲームの規則は、他者と共有された日常生活に内在しており、我々は会話のゲームをしながら、生活や習慣の中で自然にルールを習得する。言語のルールをとらえようとする事それ自体が一つのゲームである。

## 3. パラダイム=シフト

### ・【⑰】

⇒科学の歴史は、連続的な進歩ではなく、対象を考察するパラダイム(理論的な枠組み)の変換によって、科学革命が断続的に起こることによって進む、と説いた。

### ・【⑱】 (理論的枠組みの変換)

パラダイムの採用⇒通常の科学⇒異常な現象の出現による危機⇒科学革命⇒新しいパラダイムの採用

#### ・Ex. 宇宙論の転回 天動説から地動説へ

⇒宇宙論の転回は、人類の知識が連続的に増したことを意味するのではなく、天動説という古い理論的枠組み(【⑲】)が地動説という新しい理論的枠組みへととって代わられた出来事(パラダイム=シフト)。

⇒ヒトはパラダイムの内部で思考するが、従来の枠組みで説明できない事実が確認されると、これを説明するために新たな枠組みが採用されていく。